

中世後期～近世初頭における 一四世紀フランスの狩猟書の受容

頼 順 子

はじめに

本報告では、一四世紀フランスで成立した狩猟書という史料の受容と継承の事例を、一七世紀まで射程に入れて取り上げる。

まず前提として、継承される史料の器となる支持体と形態について触れておきたい。西欧中世においては、書物の形態は獣皮紙（羊皮紙・犢皮紙など）を支持体とした冊子体（codex）が主流であるが、一三世紀頃から紙も用いられはじめる。しかし、巻子本（*rotulus*）⁽¹⁾は典礼書・公文書・年代記など用途が限られていた。⁽²⁾

また、西欧では中世末期に活版印刷術が導入されるまでもつぱら写本が流通していたが、それらは専門の工房で製作され、贈答・相続の対象ともなる威信財として機能する豪華彩色写本と、個人がみずからの手で筆写して所持した写本におおまかに区別することができる。一五世紀後半に活版印刷術が導入された後も、工房で製作される写本のステイタスがすぐに揺らぐことはなく、一六世紀前半まで版本と競合する関係にあった。⁽³⁾

以上のような状況のもと、一四世紀フランスで成立した狩猟書は、最初は写本、一五世紀後半以降は版本の形態も取りながら受容・継承されていくことになる。

一・問題の所在

中世後期フランス社会では、王侯貴族のあいだで狩猟と狩猟書が流行した。西欧では中世初期から狩猟権は国王大権と結びついた特権であったが、フランスでは初期ヴァロワ朝の一四世紀末から一五世紀初頭に、王権によって身分にもとづく狩猟統制が行われるようになった。狩猟は貴族のものであると法の中で定義され、貴族の文化、あるいはステイタス・シンボルの一つと認識されるようになったのである⁽⁴⁾。

一三世紀後半以降、西欧ではさまざまな俗語の教化の書や技術書が流通した。それらの書物は最初ラテン語の翻訳だったが、やがて俗語のオリジナルな著作が登場する。フランスでは、ヴァロワ朝成立（一三二八年）以降、王族の宮廷を中心に豪華彩色写本の製作・蒐集が流行していたが、一四世紀後半以降、技術書の一種である狩猟書もその対象となった。このことは、狩猟が貴族文化として認知されたことを象徴的に示している。

本報告で取り上げる狩猟書とは、「狩猟および／あるいはその補助物——四足動物または猟鳥——にかんする教育的な著作という意味において、実際に行う者を対象とした狩猟術の書」（B・ヴァン・デン・アベル）のことである。主題は猛禽類や猟犬を用いた貴族的な狩猟（*fauconnerie, chasse au vol / vénerie, chasse à courre*）、罾や飛び道具を用いた狩猟であり、その内容は狩猟の技法と手順、猟犬や猟鳥の種類の説明とその飼ひ馴らし方、日常の管理、病気の治療法などである。表現形式は韻文・散文双方が用いられており、多彩な様相を呈する⁽⁵⁾。

西欧中世の狩猟書は、一〇世紀頃にラテン語で書かれた鷹の病気の治療法の断篇にまでさかのぼることができる。一二世紀から一三世紀にかけては、神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世『猟鳥を用いた狩猟術について』（一二四四—一二五〇頃）をはじめとする主要なラテン語の鷹狩りの書が成立した。一三世紀後半以降は、猟犬や罾、飛び道

具などを用いた狩猟法を扱う書物が登場する。そして、他のジャンルと同様、俗語で狩猟書が書かれはじめた。フランスでは一三世紀にオイル語（フランス語）の『鹿狩り』が登場した。

一四世紀後半、フランス王家であるヴァロワ家の周辺で四点の狩猟書が相次いで成立した。すなわち、アンリ・ド・フェリエール『モデュス王とラティオ王妃の書』（一三五四―一三七六頃成立）、ガース・ド・ラ・ビュイーニユ『狩猟物語』（一二七七以前成立）、ガストン・フェビュス『狩猟の書』（一二八七―一三九一頃成立）、アルドゥアン・ド・フォンテーヌヌーゼラン『狩猟宝典』（一三九四頃成立）である。⁶『狩猟宝典』を除く三点の著作は、一六世紀まで写本・版本が再生産され続け、狩猟の手順の規範としての役割を果たした。⁷

一五世紀には、ラテン語の著作の翻訳や翻案なども含め、鷹狩りを中心に二〇点強の著作が登場したが、オリジナルは少ない。しかし、一五六七年にギヨーム・タルディフ『鷹狩り術の書』⁸など一五世紀のいくつかの鷹狩りの書を収録した集成本が刊行され、以後、一六二八年までに少なくとも四つの版元から六度版を重ねた。⁹

中世フランスの狩猟書という史料は、どのように後代に継承されていったのだろうか。フランスにおける書物の受容史は、近世の書物についてはA・シャルティエなどにより活発に研究が行われているが、中世の狩猟書については状況が異なる。これまで狩猟書の研究は、H・ヴェルト、G・ティランダーとその後継者、B・ヴァン・デン・ヘルらによる校訂など、文献学分野を軸として、おもに文学（A・ストリューベル、Ch・ド・ソーニエ、ヴァン・デン・ヘル）や図像学分野（Ph・メナール、V・リエーグルほか）において研究が展開されてきた。¹⁰そのため、狩猟書が史料として引用される際は、テキストや図像は所与の存在として扱われることが多い。また、正本（オリジナル）が重視され、テキストの変更や削除といった行為も後代における書物の受容の一形態であると捉え、抄本や古版本まで射程に入れた受容史研究が行われることはほとんどなかった。

そこで、以下、一四世紀なかばから後半にかけてヴァロワ家の周辺で成立した『モデュス王とラティオ王妃の

書』をはじめとする上記四点の狩猟書のケースを取り上げ、まずそれらの著作が中世後期から近世初頭にかけて誰に受容されたのか、判明している写本の所持者をもとに明らかにし、次に、その内容がどのようにに継承されたか、テキストが改変された事例に注目しながら紹介していきたい。

二・一四世紀の狩猟書は誰に受容されたか

(一) 四点の狩猟書成立の経緯

『モデウス王とラティオ王妃の書』、『狩猟物語』、『狩猟の書』、『狩猟宝典』の著者であるアンリ・ド・フェリエール(生没年不詳)、ガース・ド・ラビュイーニュ(一二三八頃—一三八〇頃)、フォワ伯・ペアルン副伯ガストン・フェビュス(一三三一—一三九二)、アルドゥアン・ド・フォンテーヌグラン(一三九九没)は、いずれもヴァロワ家の宮廷とかかわりのある人物である。

アンリ・ド・フェリエールの経歴と生涯はほとんど分かっていないが、ノルマンディのフェリエール・サンテイレールを本拠地としていた、一一世紀にまでさかのぼる古い貴族家系出身と推定されている。フェリエール家はブルトゥイユの森を所有し、フランス王の狩猟に随行していた。¹³ガース・ド・ラビュイーニュもノルマンディの貴族家系出身で、聖職者となりヴァロワ朝のフィリップ六世(位一二八—一三五〇)からシャルル六世(位一三八〇—一四二二)の治世初期にわたって宮廷礼拝堂付首席司祭を務めた。¹⁴ガストン・フェビュスは、南仏の領邦君主で、妃のアニェス・ド・ナヴァールを通じてヴァロワ家と縁戚関係にあった。¹⁵アルドゥアン・ド・フォンテーヌグランは、アンジューの在地有力領主ヴェイエユ家と縁戚関係にある古い貴族家系出身で、ヴァロワ一族のアンジュー公ルイ二世(一三七七—一四一七)の家臣である。¹⁶

四点の狩猟書のうち『狩猟物語』と『狩猟の書』はジャン二世の四男ブルゴーニュ公フィリップ二世(豪胆公、

一三四二—一四〇四)に、また『狩猟宝典』はアンジュー公ルイ二世とその弟に献呈された¹⁷⁾。また、『狩猟の書』以外の三点の著作には、ジャン二世からシャルル五世の治世初期にかけて王国の治水林野行政を掌握し、狩猟の名手としても知られるタンカルヴィル伯ジャン二世・ド・ムラン(一三二五頃—一三八二)への言及が見られる。このことから、四点の狩猟書は、ヴァロワ一族の宮廷を核とするサークルの中で成立したといえる。

(二) 四点の狩猟書の所持者

では、四点の狩猟書の写本は誰によって所持されたのだろうか。これまでに判明している中世から近世までの狩猟書の所持者は、ヴァロワ家の王族とその取り巻きをはじめとした帯剣貴族が大半である¹⁸⁾。たとえば『モデュス王とラティオ王妃の書』の写本は、一四六七年のブルゴーニュ公の財産目録に四点記載されているほか、ダンマルタン伯シャルル・ド・トリ(一三九四以降没)¹⁹⁾、シャルル・ド・クロイ(一四五五—一五二七)、ルイ・ド・ブリュージュ(一四二二—一四九二)らブルゴーニュ公家に仕えた貴族や、ロベール・ド・ロリス(一二三八〇頃没)²⁰⁾、ジャン・ド・モンタギュ(一三四九頃—一四〇九)²¹⁾、フランス王軍元帥ルイ・ド・サンセール(一三四一—一四〇二)、フランス海軍元帥ルイ・マレ・ド・グラヴィル(一四三八—一五一六)などフランス王家に仕えた貴族が所持していた。このうち、ジャン二世の侍従・顧問を務めたロベール・ド・ロリスとシャルル六世時代に財務卿、ついでフランス大家令となったジャン・ド・モンタギュ²²⁾は、活動時期は異なるが、フランス王に仕え、その功績によって平民から貴族に成り上がった人物という点で共通している。

これらの写本の中には、最初の所持者の手を離れてブルゴーニュ公フィリップ二世、ペリー公ジャン、ルイ二世などヴァロワ一族の手に渡り、子孫に代々継承されていったものもあった。たとえばフランス国立図書館所蔵のフランス語写本一二三九九番は、シャルル・ド・トリからブルゴーニュ公フィリップ(豪胆公)に献呈され、ヴァ

図 1 フランスの王族の家系図 1 (13 世紀後半～14 世紀中葉)

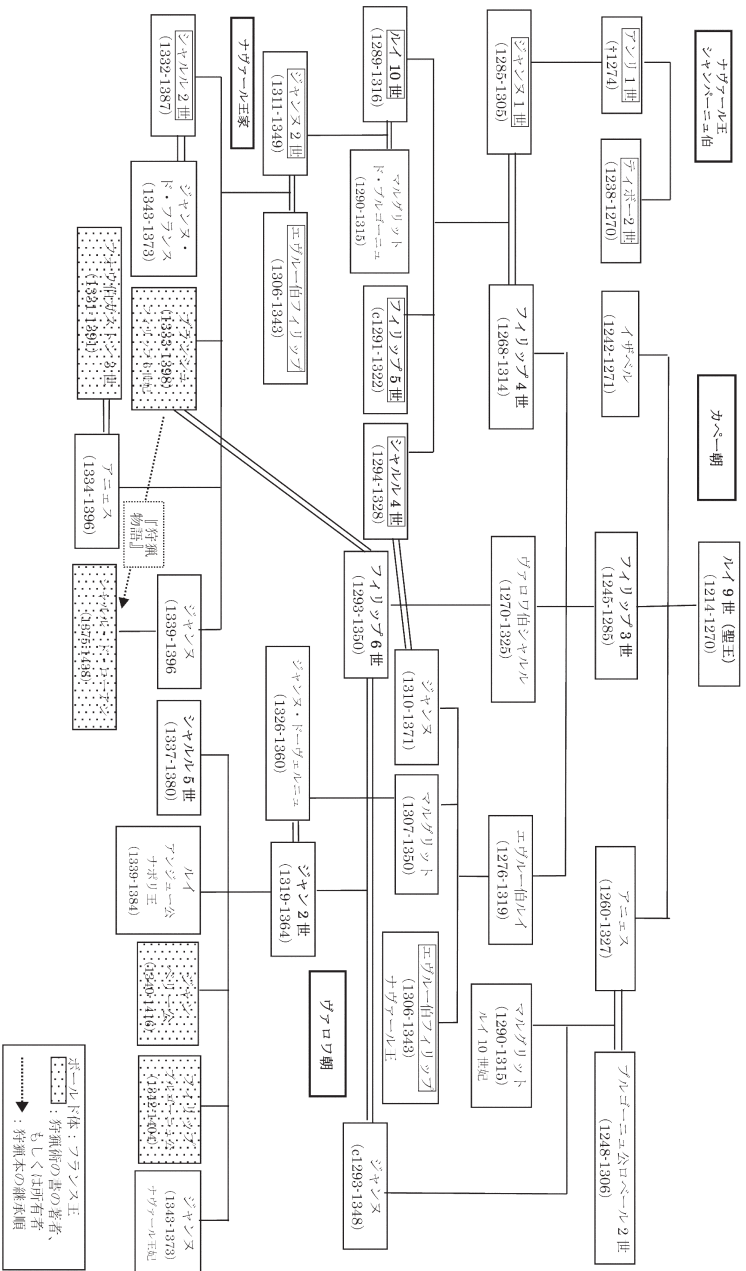
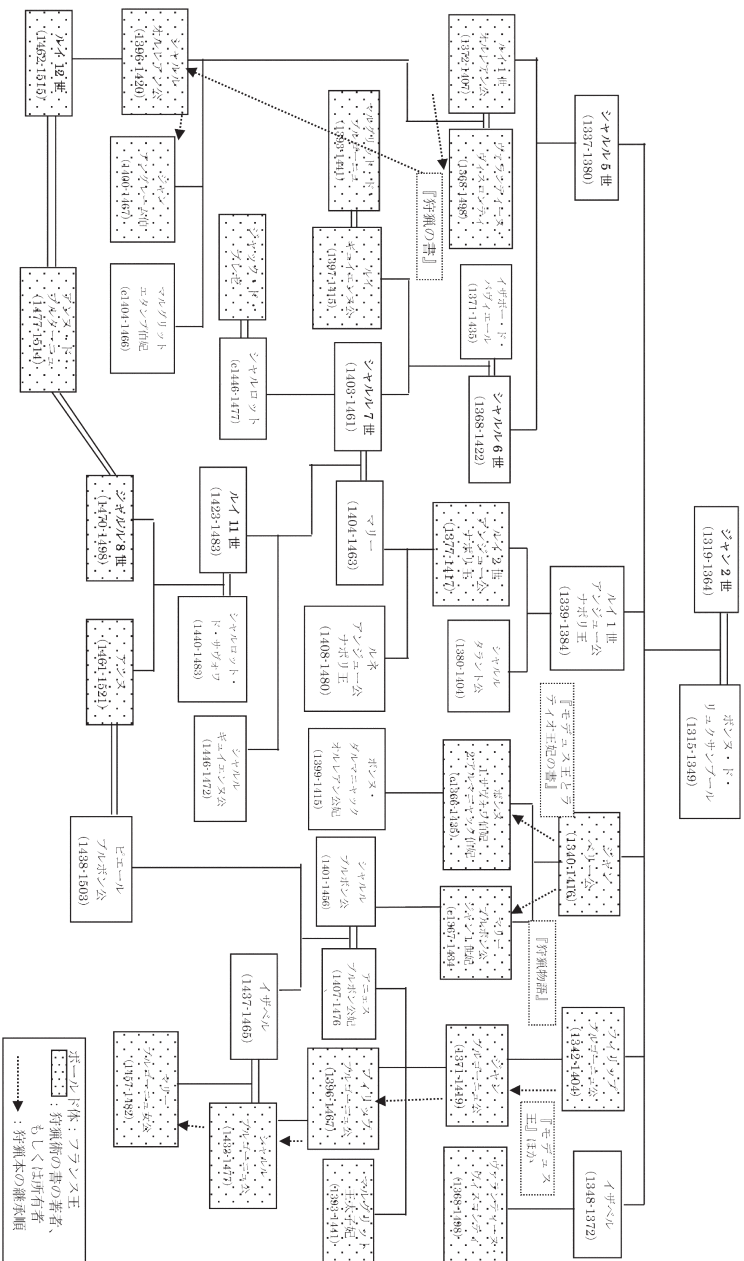


図 1・2 出典: 頼順子「中世後期の狩猟と狩猟者の書」天城大学, 2010年, cx11, cx11n頁。

図2 フランスの王族の家系図2 (14世紀後半～15世紀末)



ロワールブルゴーニュ家で継承された。また、トリノ州立図書館所蔵の写本J B二・一八番はジャン・ド・モンタギユ旧蔵本で、彼の家紋が挿入されているが、何らかの経緯によりシャルル五世の弟ペリー公ジャン（一三四〇—一四一六）の手に渡り、第二〇二葉裏に公の署名が書き込まれている。その後この写本は公の娘のボンヌ・ド・ベリーの婚資として最初の嫁ぎ先のサヴォワ家にもたらされ、そこで継承されていた。

図1・2はフランス王家の系図と狩猟書の写本の継承の流れを示したものであるが、ここからも、ヴァロワ家の周辺で成立した四点の狩猟書の写本が数世代にわたって継承されてゆく様子が見て取れる。

以上のように、四点の狩猟書は、おもにフランス王家を取り巻く帯剣貴族にステイタス・シンボルとして受容され、彼らが製作させた写本は、他の写本と同様に威信財として機能しながら継承されていたのである。

三・狩猟書はいかに継承されたか——内容が改変された事例から

(一) 貴族的な狩猟観にもとづく受容と内容の改変

ヴァロワ家の周辺で成立した四点の狩猟書は、『狩猟宝典』を除いて狩猟書の権威とみなされ、一六世紀まで再生産されることとなった。しかし、テクストは同時代の多くの世俗的な著作と同様、常にオリジナルに忠実であつたわけではなく、一部だけ抜粋されたり、内容の改変を蒙ったりしながら継承されていた。以下、『モデュス王とラティオ王妃の書』と『狩猟の書』を例に、改変を伴う継承の事例を紹介し、どのような内容が継承の対象になったのか分析する。

① アンリ・ド・フェリエール『モデュス王とラティオ王妃の書』

『モデュス王とラティオ王妃の書』は、全二五九章の散文で、『モデュス王の狩猟の書』および『災厄の夢』の

二部構成となっている。第一部『モデュス王の狩猟の書』（全二三九章）が狩猟書であり、貴族的な狩猟の双壁である猟鳥と猟犬を用いた狩猟法、貧しい者向けの罾を用いた狩猟法、弓など飛び道具を用いた狩猟法が取り上げられている。第一部の狩猟書と対となる第二部『災厄の夢』では、著者の幻視による戦争と疫病の流行による災厄に満ちた世界が寓意的に描かれ、狩猟にかなする言及はない。現存する古写本は三七点あり、このうち『モデュス王の狩猟の書』のみが収録された写本が六点存在する。

六点のうちの一点、ロベール・ド・ロリス旧蔵のシャンティイ・コンデ美術館所蔵写本三六五番は、『モデュス王の狩猟の書』の一部の章だけ抜粋された抄本である。写本は『モデュス王とラティオ王妃の書』の成立後間もない時期に製作されたと推定されている。ロベール・ド・ロリスはパリの都市民として生まれ、聖職者になった後にフィリップ六世とジャン二世に仕え、政治・外交・財務分野での功績が認められて平民から貴族に叙せられた。彼は『モデュス王とラティオ王妃の書』全体の内容ではなく、『モデュス王の狩猟の書』の鹿狩り（第三―三二章）と鷹狩り（第八九―一一三章）の章だけを抜粋した彩色写本を製作させ、最初のページにみずからの紋章を描かせた。つまり、彼はもつとも貴族的な狩猟とされる内容だけを選択して受容し、同時代の王侯貴族に倣って、ステイタス・シンボルとして豪華彩色写本を製作・所持したのである。

『モデュス王とラティオ王妃の書』は四点の狩猟書の中でもつとも長期にわたり受容され、版本の時代にも繰り返し再生産された。現在確認されているだけでも、一四八六年から一五六〇年までのあいだに異なる版元から十度刊行されている。しかし、テキストの内容すべてがオリジナルに忠実に継承されたわけではない。まず、狩猟と無関係の『災厄の夢』が削除の対象になった。一四八六年に刊行されたネレ版では、『モデュス王の狩猟の書』のみが収録された。今日存在が確認されている『災厄の夢』の版本は、一五〇五年のヴェラール版²⁴のみである。一六世紀の版本には、一五世紀に刊行されたネレ版には見られない、版元による大幅な改変が見られる。ラティオ王妃に

よる教訓化、鹿狩りと鷹狩りの優劣を論じた討論 (debate) とタンカルヴィル伯による評定のような、一四世紀に流行した文学形式で記述された部分や、記憶が継承されなかった過去の人名は残らず削除され、狩猟のマニユアルの部分だけが選択的に継承されたのである。一五六〇年に刊行されたセルトゥナ版、コロゼ版、ル・ノワール版は、タイトルページを除くと、誤植も含めすべて同一の内容(テキストおよび木版画八点)である。これらの版には、最初の版元ヴァンサン・セルトゥナによる緒言およびセルトゥナに版權・独占販売権を与える特許状の抜粋に加え、狩猟の用語解説があらたに挿入されている。

②ガストン・フェビュス『狩猟の書』

『狩猟の書』は、全八六章の散文によつて構成されている。猟犬を用いた狩猟と道具を用いた狩猟が主題として扱われ、猟鳥を用いた狩猟は取り上げられていない。また、武勇、愛、狩猟に邁進するという序文の記述をはじめ、随所で貴族イデオロギーが前面に押し出されている。狩猟のマニユアルとしての完成度が高いことから、『フェビュス』という通り名で呼ばれ、一四世紀から一六世紀にかけて人気を博し、四点の狩猟書の中で最多の四六本の写本が残されている。

このうち四点は一部の章を抜粋した一五世紀の抄本である。四点のうち二点⁽²⁵⁾は、『善き猟犬係』とも呼ばれ、當時もっとも高貴な狩猟とされた鹿狩りの手順と、猪狩りの一部の手順だけが収録されている。章の構成も変更され、三二―三五章、二七―三〇(前半部分)章、三九―四一章、三八章、三〇章(後半部分)、三七章、四二章、五四章、四三章(二部に分割)の順に収録されている⁽²⁶⁾。残りの二点⁽²⁷⁾は、ルイ・ド・グーヴィ(生没年不詳)という貴族が『狩猟の書』の猟犬係の修行と鹿狩り(猪狩りは除外)の手順にかんする章(二二―二四、二六―三五、三八―四一、四四、四五章)を抜粋して『ヌーヴラン・ド・ヴェヌリ』という題をつけ、ヴァロワ家の王族アランソン公⁽²⁸⁾

に献呈したものである。プティ・パレ美術館所蔵の写本LDUT二一七番はアランソン公旧蔵本で、写本の第一葉裏には、トップに聖ミカエル像をあしらった、帆立貝型の金鎖を持つ聖ミシェル騎士団の首飾りに囲まれたアランソン公家の紋章が一面に描かれ、隣第二葉表にはルイ・ド・グーヴィがアランソン公に写本を献呈する図が描かれている。

二つの抄本のいずれにおいても、高貴でないとされた罽や飛び道具を用いた狩猟法の章が削除され、貴族的な狩猟にかんする内容だけ取り上げられている点が共通している。ロベール・ド・ロリスの『モデュス王の狩猟の書』の写本の事例も併せて考察すると、一四世紀の狩猟書は、しばしば鹿狩りあるいは鷹狩りのような、もともと貴族的とされる狩猟法の内容だけが選択的に継承されていることが分かる。

『狩猟の書』の版本は、一六世紀の第一四半期にパリで三度刊行された。ここでも版元による改変が見られ、一五〇七年に刊行されたヴェラル版と、前後して刊行されたと推定されるトレブレ版は、『狩猟の書』のテキストそのものはオリジナルなおおむね忠実であるものの、オリジナルには無かった巻頭詩が挿入されているほか、『狩猟物語』の鷹狩りおよび、猟犬を用いた狩猟と猟鳥を用いた狩猟の優劣についての討論とタンカルヴィル伯による評定の部分が挿入されている。このことは、一六世紀になってもなお猟犬と猟鳥を用いた狩猟を一对の貴族的な狩猟とみなす考え方が根強かったことをうかがわせる。また、著者がフォワ伯「フェビュス」であることを版元は理解しているものの、ベアルン副伯の称号やノルウェー、スウェーデンといった外国の地名についての知識がなかったのか、その部分が誤植となっているほか、オリジナルの献呈の対象であったブルゴーニュ公フィリップ（豪胆公）に関連する内容は完全に削除されている。最後に刊行されたル・ノワール版（二五二五年頃？）では、「フェビュス」以外の著者の情報はほとんど誤りであり、多数の乱丁が見られるほか、『狩猟物語』の内容もふたたび削除されている。

おわりに——技術書から歴史史料へ

一四世紀なかばから後半にかけてヴァロワ一族の宮廷を核として成立した四点の狩猟書のうち三点は、中世後期から近世に至るまで、帯剣貴族の狭いサークルの中で権威として受容・継承されていた。約二世紀という時間の長さにもかかわらず、貴族的な狩猟が猟犬と猟鳥を用いた狩猟であるという価値観は不変であり、テキストが改変されて継承される際に影響を与え続けた。また、狩猟の技法にかんするテキストの継承は、貴族的な狩猟の「技術」の継承とも分かちがたく結びついていた。これに対して、原著が成立した当初著作に含まれていた人名や地名など、狩猟の技法以外の情報は継承されにくく、その傾向は時代が下った一六世紀の版本においてとりわけ顕著である。

一五六〇年以降、近代に至るまで、一四世紀の狩猟書は再版されることはなかった。これは、あらたな著作の登場により、技術書としての役割を終えたためと考えられる。しかし、中世の写本は好事家の蒐集対象となり、テキストの内容よりも、書物の形態（豪華彩色写本であるかどうかなど）が重視されるようになった。

しかし、テキストの内容がまったく顧みられなくなったわけではない。狩猟という技術とは無関係の記憶にかかわる部分、すなわち一六世紀の版本ではなおざりにされた一四世紀の固有名詞が、一七世紀の国王修史官アンドレ・デュシェーヌ（一五八四—一六四〇）の関心を引いたのである。それは、一四世紀の四点の狩猟書の中で唯一古版本を持たず、写本もほとんど再生産されなかった『狩猟宝典』の中に列挙されていた、当代の角笛や狩猟の名手とされたフランスの王侯貴族の名だった。そこには、ブルゴーニュ公フィリップ（豪胆公）やタンカルヴィル伯ジャン二世・ド・ムラン、ガストン・フェビュスなどの名も記されていた。フランス国立図書館所蔵の写本 *Duchesse* 六五番には、ギヨーム・ド・ナンジ『フランス王年代記』や『サン＝ドニ年代記』をはじめとした史書のほか、伝

記、聖人伝、慣習法など中世の著作がデュシェーヌの手で大量に転写されているが、それらの最後に『狩猟宝典』の固有名詞が列挙された部分だけが筆写されている。⁽²⁹⁾ このことは、中世の狩猟書が歴史史料として継承されるあらたな時代が到来したことを示唆している。

註

- (1) 縦巻きの卷子本を指す。横巻きの volumen は五世紀頃まで用いられていたが、冊子本に取って代わられた。
- (2) B・ビショップ (佐藤彰一・瀬戸直彦訳) 『西洋写本学』岩波書店、二〇一五年。七―四八頁。GUÉRIN, P. (dir.), *Lire le manuscrit médiéval : Observer et décrypter*, 2^e éd., Armand Colin, 2017, p. 21-87.
- (3) 小川知幸「なぜその手写本は大量生産されたのか——一五世紀活版印刷初期における筆写工房——」、『二〇〇七年度西洋史研究会大会自由論題報告要旨』、二〇〇七年一月二四―二五日、於青山学院大学、四―六頁。
- (4) 堀越宏一『ものと技術の弁証法』岩波書店、二〇〇九年、一七四―一七八頁。頼順子「中世後期の狩猟と狩猟術の書」、博士論文、大阪大学、二〇一〇年 (未刊行)。五一―七頁、三九―七一頁。同「一五―一六世紀フランスにおける狩猟書の受容——アルトゥルシュ・マ・ブラゴーナ『鷹狩り』を例に——」、『関西大学西洋史論叢』、二〇一三年、第一六号、三四―三五頁。
- (5) SMETS, A. et B. VAN DEN ABEELE (以下 VDA と略記), «Manuscrits et traités de chasse français du Moyen Âge. Recensement et perspectives de recherche», *Romania*, 116, 1998, p. 318 (以下「Manuscrits et traités de chasse français du Moyen Âge」と略記)。
- (6) 著作については以下の校定版を参照した。Henri de Ferrières, *Les livres du roy Modus et la royne Ratão*, éd., Gunnar Tiliander, Tome I, Paris, Société des anciens textes français, 1932; Gace de la Buigne, *Le roman des deduis*, éd. Åke Blomqvist, (Studia romanica holmiensia edenda curavit Gunnar Tiliander III); Karlshamm, 1951; Gaston Phebus, *Livre de chasse, édité avec introduction, glossaire et reproduction des 87 miniatures du manuscrit 616 de la Bibliothèque nationale de Paris*, éd., Gunnar Tiliander, (Cynegetica 18), Karlshamm, Johansson, 1971; Hardouin de Fontaines-Guérin, *Trésor de vénère composé l'an M. CCC.LXXX.IV par Hardouin, seigneur de Fontaines-Guérin*, éd.; Henri Michelant, Metz, Rousseau-Pallez, 1856.
- (7) 頼「二〇一〇年」三三―三四頁。
- (8) タルディフの原著は『鷹狩り術と猟犬の書』であり、猟犬を用いた狩猟も扱われていたが、集成本には鷹狩り術の書のみが収録された。

- (9) 頼、二〇一〇年、三三頁。
- (10) R・シャルティエ、G・カヴァッロ編（田村毅、月村辰雄他共訳）『読むことの歴史』大修館書店、二〇〇〇年。
- (11) 西欧中世の狩猟書の歴史およびおもな研究史・研究動向については、以下を参照された。SMETS et VDA, «Manuscrits et traités de chasse français du Moyen Âge. Recensement et perspectives de recherche»; Id., *La Littérature cynégétique*, Turnhout, Brepols, 1996 (Typologie des sources du Moyen Âge occidental, fasc.75). 狩猟書の文学的系譜については STRUBEL, A. et Ch. de SAULNIER, *La poésie de la chasse au Moyen Âge: Les livres de chasse du XIV^e siècle*, Paris, P.U.F., 1994; VDA, *La Littérature cynégétique*, p.31-56に詳しい。その他の研究史については頼、二〇一〇年、二〇―二三頁を参照された。
- (12) 写本の所持者を特定する方法は、現存する写本に残された家紋や署名を手がかりにするやり方と、財産目録や蔵書目録に記載された書名からたどるやり方がある。本報告では、現存する写本の所持者をもとに分析を行った。
- (13) *Les livres du roy Modus*, p. LIII-LIV.
- (14) HASENOHR, G., «Gace de la Bigne, maître chapelain de trois rois de France», *Études de langue et de littérature du Moyen Âge offertes à Félix Lecoy par ses collègues, ses élèves et ses amis*, Paris, Champion, 1973, p. 181-192.
- (15) 図1参照。
- (16) MICHELANT, *op. cit.*, p. XI-XII; BRUNELLIÈRE, J., «Gaston Fébus et Hardouin de Fontaines-Guérin: deux approches des sonneries de chasse au XIV^e siècle», dans *Musique•Images•Instruments 7: Ecoles et traditions régionales 2e partie*, Paris, CNRS, 2005, p. 149-150.
- (17) 頼、二〇一〇年、一〇五、一一〇、一一五頁等を参照された。
- (18) フランス王が狩猟書の献呈対象になる時期は一五世紀末と遅く、シャルル八世（一四七〇―一四九八）の時代を待たねばならない。また、シャルル八世以前に王が狩猟書を所持した記録も残されていない。これは、中世末期まで狩猟が王の務めにふさわしくない世俗の娯楽とみなされていたためと考えられる。中世の狩猟に対する認識については、頼、二〇一〇年、一三一―一七頁参照。
- (19) Paris, BNF fr.12399, 177ff.
- (20) Chantilly, Musée Condé 365, 27ff.
- (21) Turin, Archivio di Stato, Jb. II. 18, 202ff.
- (22) ジャン・ド・モンタギューには同名の聖職者の弟が存在するが、写本の所持者は豪華彩色写本の蒐集家として知られていた前者であると考えられる。頼、二〇一〇年、一三九頁。
- (23) テュロ＝シャラによると、鹿狩りが「王にふさわしい(royal)」と狩猟術の書のなかで述べたのはガースが最初であるという。TUCOO-CHALA, P., *Gaston Fébus:*

- un grand prince d'Occident au XIV^e siècle*, Pau, éd. Marripouey jeune, 1976, p. 166. 鹿狩りが高貴な狩猟であるという認識は、一四世紀なかばのフランスにおいてすでに広く共有されていたと考えられる。
- (24) このヴェラル版の『災厄の夢』は、タイトルページが欠落しているため、これより前に『モデュス王の狩猟の書』が存在した可能性がある。
- (25) Paris, BNF Arsenal 3252, 71ff. もう一点はM・ジャンソン旧蔵本（現在所在不明）。
- (26) SMETS et VDA, «Manuscripts et traités de chasse français du Moyen Âge», p. 341.
- (27) Paris, Musée du Petit-Palais, LDUT 217, 59ff. もう一点はJ・ピション旧蔵本（現在所在不明）。
- (28) アランソン公シャルル四世（一四八九―一五二四）と推定されている。 https://www.arlima.net/il/louis_de_gouvis.html（二〇一八年六月二十七日取得）。
- (29) Paris, BNF Duchesne 65, f.191r-v.
 （本報告は二〇一一年度松下幸之助記念財団研究助成による研究成果の一部である）。